プロジェクトリーダー：愛知工業大学　工学部　内田臣一教授

事　業　実　績　調　書

（1）プロジェクト名	瀬戸市の川をもっと知ろう・遊ぼう

（2）プロジェクトの成果（※どのような成果が得られたかについて具体的に記載）

瀬戸市南山口町の大六川（南山砂防池）、越中川、神明川（神明砂防池）において、水生生物をのべ25地点で、すなわち湿地の水生動物を9地点で、河川と池のエビ類（一部魚類）を12地点で、河川のヒメドロムシ類を4地点で調査した。その結果、4地点でホトケドジョウ、9地点でヒメタイコウチの生息地を新たに発見した。これら2種はいずれも愛知県によって絶滅危惧種に指定されている。また、南山砂防池とそこから流出する大六川では在来のヌマエビ属を8地点で発見した（おそらく瀬戸市から初記録）。外来種に圧迫される恐れがある在来のヌマエビ属と上記2種の絶滅危惧種の生息を確認したことは、瀬戸市内の川には貴重な水生生物の生息を支える環境がまだ残っていることを示すものと考えられる。

また、瀬戸市吉野町の吉田川、幡山町の矢田川、北白坂町の白藤川、海上町の赤津川、吉野町の瀬戸万博記念公園に隣接する湿地で水生生物の観察会を計7回開催し、一般参加者が魚・貝・エビ・水生昆虫の多数の種を採集し、観察した。これによって、参加者は瀬戸市の川などの水生生物を実物に触れながら理解することができた。

（3）プロジェクト実施内容（※事業の実施方法、時期、場所、回数、市民への周知方法、参加人員等を含め、その内容を具体的に記載）

水生生物の調査は、2024年9月3日（大六川6地点でヒメタイコウチ・エビ類、内田・学生5人）、9月6日（神明川5地点で魚類・エビ類・ヒメドロムシ類・ヒメタイコウチ、内田・学生5人）、9月13日（大六川・越中川4地点でエビ類・ヒメタイコウチ、内田・学生7人）、11月8日（大六川6地点で魚類・エビ類・ヒメドロムシ類、内田・学生4人）、11月14日（大六川・越中川4地点でエビ類・ヒメドロムシ類、内田と学生1人）に実施した。これらの調査で採集された水生生物は、研究室へ持ち帰って名前を調べ、ねじ口瓶中にエタノールに漬けて保存した。調査結果の一部は、6月3日の瀬戸蔵での東京大学主催の研究集会、6月11日の矢作川環境技術研究会（名古屋市金山）でポスター発表した。

水生生物の観察会は、2024年4月20日に吉野町の吉田川（愛知工業大学主催、40人参加）、6月8日に幡山町の矢田川（愛知県・瀬戸市環境課共催、20人参加）、8月4日に北白坂町東京大学赤津研究林内の白藤川（シデコブシの会・瀬戸市環境課共催、30人参加）、8月 8日に吉野町の吉田川（愛知工業大学主催、30人参加）、9月7日吉野町の瀬戸万博記念公園に隣接する湿地（瀬戸市環境課主催、12人参加）、9月9日海上町の赤津川（幡山東小学校PTA主催、34人参加）、9月14日吉野町の同上湿地（愛知工業大学主催、10人参加）において開催された。また、瀬戸市理科教育研究会の水生生物調査（内田町の水野川、47人参加）に大学院生の石川進一朗が参加し、交流を深めた。

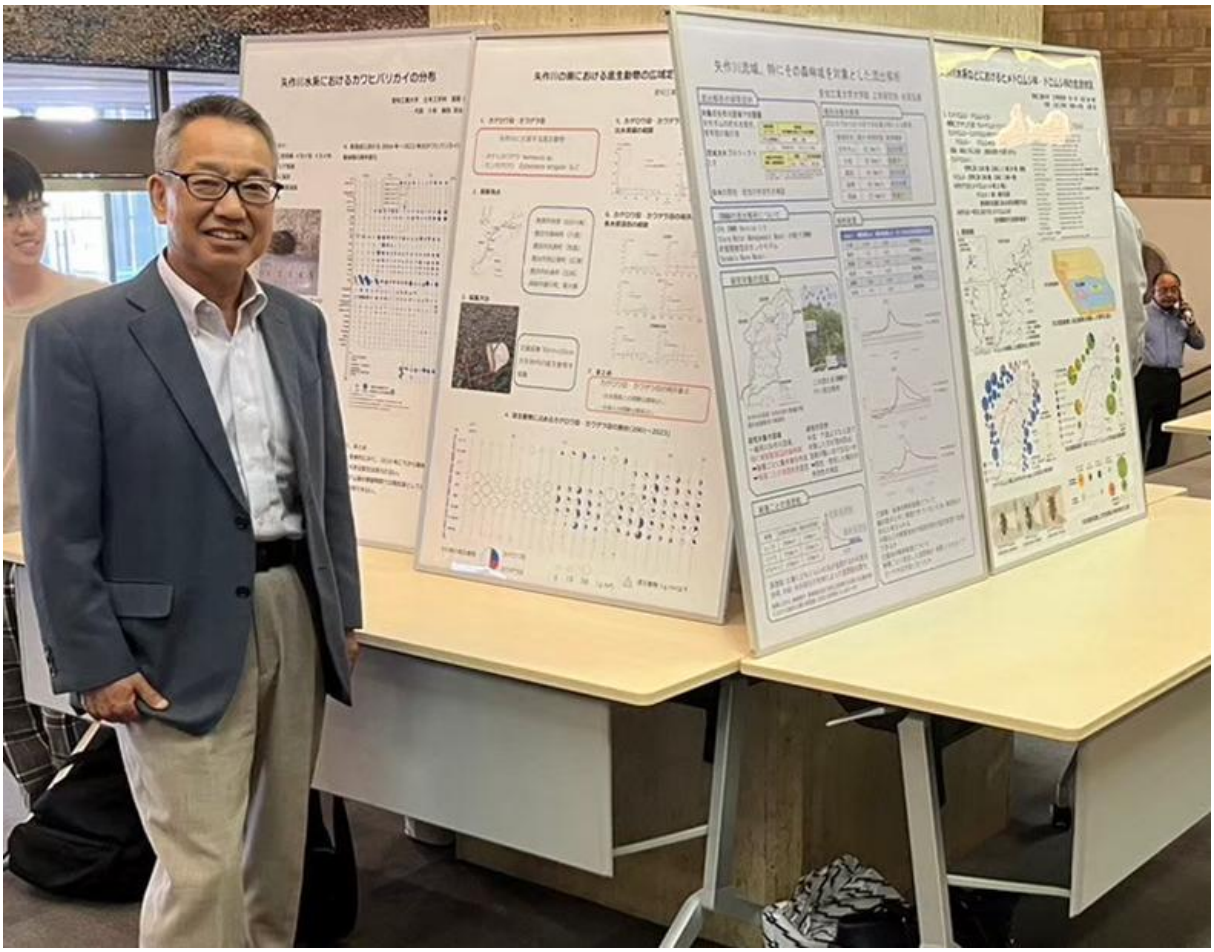
（4）プロジェクトの今後の課題と展望

瀬戸市南部の丘陵の河川には絶滅危惧種2種を含む多様な水生生物が生息していることがわかった。今後はさらに広く瀬戸市の河川に生息する水生生物を調べる必要がある。

また、観察会を7回開催したが、それだけでは瀬戸市の河川・池沼の水生生物を広く市民に知ってもらうことが十分にはできない。瀬戸市環境課との協議では、今までこの地域で観察会などを実施してきた他の団体において指導者の高齢化などによって講師などを務める人材が不足しているとのことである。そのような人材を育成し、環境に関する社会教育・学校教育活動が無理なく持続できるような体制を構築する一助となるような取り組みを今後進めていくことが必要となると考えられる。

2024 年 5 月 18 日 矢田川での調査と採集された水生生物

2024 年 9 月 3 日　南山砂防池での調査と採集されたエビ類



2024 年 6 月 11 日　名古屋市中区金山　矢作川環境技術研究会での発表

2024 年 6 月 8 日　矢田川での水生生物の自然観察会